

令和3年度 第1回飯田市総合教育会議会議録

日 時 令和3年 7月28日 午前9時00分開会

場 所 飯田市役所 A301・302号会議室

1 開 会

○林企画課長 ではどうも皆様方おはようございます。

本日お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ただいまから令和3年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。私、本日、司会を務めさせていただきます飯田市企画課の林と申します。よろしくお願いいたします。

2 あいさつ

○林企画課長 それでは最初に、佐藤市長よりごあいさつをお願いいたします。

○佐藤市長 皆さん、おはようございます。

令和3年度第1回の総合教育会議ですけれども、私が市長になって初めての総合教育会議ということでもあります。

教育委員の皆さんには、日頃から、地域の子どもたちの教育、それから社会教育も含め、教育全般にわたりまして、それぞれのご見識を生かして委員としての役割を果たしていただいておりますこと、心から感謝申し上げたいと思います。

総合教育会議は、法律に基づいて行われる会議ということでもありますけれども、市長部局と教育委員会というのは、元々は、かなりしっかり分けられていたものが、そうはいつでも双方が同じ方向を向いて、お互いをしっかり理解した上でやらなければいけないという法律が作られて、総合教育会議が設けられていると認識をしています。こういう貴重な機会をいただきましたので、今日は率直に、いろいろと意見交換をさせていただきたいと思います。

協議事項としてお願いしておりますのが、教育大綱についてです。今年度から飯田市の総合計画であります「いいだ未来デザイン2028」の中期計画がスタートしているわけですが、この中で掲げている基本目標と、それから教育振興計画のほうで掲げいただいている目標というのは、方向を一にしている、同じになっているというふうに認識しております。そういった中で、教育大綱というのをどういう形で設定するかということを、今日はご協議をさせていただきたいと思います。私としては、今申し上げましたように、大きな方向性では一致しているものというふうに認識していますけれども、そのあたりを確認できればと思ってお

ります。

それから、その後の意見交換のテーマを2つ、「ICT教育」と「中学生期のスポーツ」ということで、お願いをしました。これは、私のほうで、こういうテーマでお願いをしたいというお話をしたわけですが、それぞれ率直に、今の教育委員会としての認識、方向性がどういうことなのかを、しっかり確認をさせていただきたい、まさに意見交換させていただきたいと思ったことです。

1つめのICTにつきましては、率直に申し上げれば、市長になる前に、1人1台のパソコンを導入することが、何かすごく急いでいるように見えたということがあります。何のために、どういうふうにやろうという前に、早く入れようというふうに、端から見ていて見えたわけですが、そもそも、どういうところへ向かおうとしていて1人1台のパソコンがあるのかという、そのあたりのところから意見交換させていただければということです。

それから、中学生期のスポーツについては、私も中学生になる子どもがいますので、保護者として、何と言いますか、急にそうなったという感じもあってですね。そのあたり、そもそも何のために見直しをしようとしているのか、保護者にあまりうまく伝わってないのではないかなという問題意識もありました。そのあたりについても意見交換をさせていただきたいということです。

教育というのは、本当に難しいなと改めて思います。今やったことが、すぐ目の前に現れるというわけではなくて、おそらく3年後とか5年後に振り返って見れば、あのことが今、こうなっているのか、というふうなことがある、そういうことだと思います。

ですので、今、目の前の子どもたちにやったことが、その子どもたちの将来に効いてくる。ある意味、非常に恐ろしい部分もあるわけですが、そんな長期的なことも含めて、我々と教育委員会の皆さんも、しっかり考えていかなければいけないと思いながら、今日は意見交換をさせていただきたいと思っております。

短い時間ではありますけれども、ぜひ忌憚のない意見交換ができればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○林企画課長 続きまして、代田教育長からお願いいたします。

○代田教育長 はい。

改めまして、皆さんおはようございます。

本日は、令和3年度第1回の総合教育会議ということで、教育委員の皆さんには、本日も時間をいただきましてありがとうございます。

市長が掲げる「現場と対話主義」、これをひとつ強固にするためにも、この会議はとても大

事であるし、充実した時間にしていきたいなど思っております。教育委員の皆さんには、日頃より議論していることを、ぜひ市長とも対話することによって、課題解決の方向を見だし、市長部局と教育委員会と力を合わせてやっていけると良いなど、そんなふうに思っています。

少し話はそれますが、先日、信州大学から取材を受けました。どんな取材かという、1年前のコロナ禍において、教育委員会と市長部局がどういうふうに機能したのかということでした。何回、教育委員会を開いて、どういうふうに伝達しているのかをお伝えして、回数を正確に出しながら取材を受けました。そしたら、信州大学のほうもまだレポート出る前ではありますけれども、これほどまでに教育委員会と議論をして、方向を確認しながらやっていた自治体は少なくとも、今、取材している中ではほとんどないですね、と、大変褒めていただきました。

日頃より教育委員会の方向性について、委員の皆さんの意見をいただいていることに感謝申し上げますとともに、冒頭申し上げましたとおり、「現場と対話主義」というものが、より実質化するようには本日はよろしく願いいたします。

3 協議事項

○林企画課長 それでは、協議事項に移らせていただきたいと思います。

お手元に次第と資料がございますので、ご確認をいただければと思います。

(1) 飯田市教育大綱について

○林企画課長 それでは3番の協議事項(1)飯田市教育大綱についてご提案申し上げます。

○塚平総合政策部長 おはようございます。総合政策部長の塚平と申します。

それでは、私のほうから教育大綱についてご説明いたします。

市長のあいさつにもございましたが、そもそも総合教育会議は法定会議でございます、その目的の第1番目が大綱の策定についての議論ということになっています。この大綱を、この教育会議で策定するということは、つまり市長部局と教育委員会が調整をして、同じ方向を向くということになります。

お手元の資料でございますけれども、ひとつは、こちらの「結」と書いたものです。それから、もうひとつ資料No.1と書いた横長のものがございます。

まず、こちらの「結」と書いた資料からご説明をいたしますが、これは2017年から2020年までの教育大綱でございます。市長部局の計画として「いいだ未来デザイン2028」があり、

それから、教育委員会側の計画として第2次飯田市教育振興基本計画がございまして、この2つの計画を結ぶという意味も込めて、当時のキーワードとして「結」というものを教育理念に掲げて、これを飯田市教育大綱に定めた、というのが、これまでのものでございます。非常に良いタイトルだなというふうに思っております。

今回のご提案は、もうひとつの資料で、こちらは2021年からの大綱の案でございます。未来デザイン2028の中期計画、それから第2次の教育振興基本計画、ともに答申がなされていますが、その答申の過程におきまして、教育委員会内での議論を十分していただき、教育振興基本計画を策定され、それに合わせる形で「いいだ未来デザイン」の基本方針が策定されました。

中期計画の基本目標は、教育委員会の議論を尊重する形で、市長部局で議論をさせていただき、議会に提案をして、議決を受けて基本目標が定まっております。したがって、未来デザイン側から見れば、基本目標の3・4・5が教育振興基本計画の重点目標1・2・3というものと同一ということです。

こういった形の策定経過と実績を踏まえまして、冒頭、市長あいさつにございましたように、今回策定する大綱につきましては、資料1の赤線で囲ってあるところが実質的に同一のものでございますので、この部分をもって大綱とするというふうに定めたいと事務局からはご提案を申し上げるところでございます。ご審議いただければと思います。

説明は以上でございます。

○林企画課長 ただいまご提案申し上げました内容につきまして、委員の皆様方からご発言をいただきたいと思っております。

ご発言のある方は、挙手をお願い申し上げます。

北澤職務代理、お願いします。

○北澤教育長職務代理者

前回までのこの「結」というのは、とても簡潔で、わかりやすく、といたしますか、言葉自体がわかりやすく、すぐにひらめくし、というふうに思います。今回のこの方向については、中期基本目標のほうの目標を3つと、教育振興基本計画のほうの目標3つが、きちっと一致しているというところで、非常に具体的になっているなというふうに理解をしています。

そういうわけで学校教育、社会教育、双方にまたがる目標をきちっと定めて出していくことが大事だと思いますので、私はこの方向でよろしいと思います。

以上です。

○林企画課長 ありがとうございます。ほかにご意見いかがでしょうか。

伊藤委員。

○伊藤教育委員 4年前に、この「結」という字で2つの「いいだ未来デザイン」と教育振興計画を結ぶということで、この字に表したがごとくでやったわけですね。まあこのときは、丁度この計画が出来上がったときだったので、ここに水引がありますけれど、そういう何か喜びも込めて「結」という字にしたような記憶もございます。

4年経って、今になってみると、わかっている人は良いのですけれど、この「結」ってどういうことなのだろうって、大体説明しなきゃならないわけですね。

それで、さっき原点に戻って、中期計画の3・4・5と、また、教育振興基本計画の中の重点目標3つを合わせた、ここを明確に出したという、そういうことで、今回これで良いかなと、そういうふうに思います。

○林企画課長 三浦委員。

○三浦教育委員 はい。この考え方については良いなというふうに思っています。

ただ、1つ寂しいなと思うのは、「結」という前回の教育大綱にある理念の一文字といったところではあります。

私は、教育委員になったときに、平成29年でしたが、大綱ができた年に教育委員にさせていただきました。思い入れあるのは、南信教育サミットで飯田市の教育について発表させていただいたときに、この、「結」についての飯田市の飯田という言葉、「結いの田」からきた飯田というところと、あと、そういった皆で助け合うんだというところの、そういった理念が飯田にはあるんですよ、という話をさせていただく中で、大綱の理念として「結」があるといったところに、周りの教育委員の方々が、懇親会の席で「ああ、良いのを入れたんですね」とか「だったらうちも、そういうふうになれば良かったかな」という話をいただいて、私としては、自分が関わって作ったものではありませんけれども、とっても思い入れのある、そういった大綱になっています。

やはりこういった大綱というのは、大枠な核であるわけで、具体的というよりは、そういったコアな部分であっても良いのではないかなと思います。市民、教育に携わる教育のことを考えた人が見たときに、1つの理念としてイメージできるものがあって、その次に、こういったポイントとなるものが何項目か置かれる、こういった作り方でも、私は良いのではないかなというふうに思いますので、それに適した言葉を充てる。でも、そこに適した一文字を理念として充てておいて、そこに副題ではありませんけれども、より具体的になるものを少し充てておく、そのような形の示し方も1つあるのではないかなと思います。

○林企画課長 ほかにいかがでしょうか。

上河内委員。

○上河内教育委員 はい。基本目標と重点目標、教育とその飯田の未来デザインが一致したというところで、大変明確になって共有できて良いのではないかなと思います。

三浦委員から今、「結」という一文字がとても良かったというふうなご報告をいただきました。それを聞いていて私も、その「結」という言葉は、やはり飯田を象徴するような言葉ですし、地域性、人と人との絆というようなところを結ぶという意味でも良い言葉だなと思いますので、三浦さんの意見に賛成です。

○林企画課長 はい、ありがとうございます。

そのほか、佐藤市長。

○佐藤市長 つくりとして、非常に結びつきが強くなった今回の形というのは、ひとつ良いのかなと思います。

今、三浦委員からあったように「結」というのを理念という言葉で掲げるのか、何という言葉で掲げるのかわかりませんが、全体のタイトルというか、そういう形で「結」というのは掲げ方もあるのだろう。それはそれで何かまとまりがあるかもしれないなと思って聞いておりました。

○塚平総合政策部長 それでは事務局からよろしいでしょうか。

ただいまの委員の発言、非常に私、重要なことかなと思いました。また、市長もその方向のご発言をされましたので、これを受けまして一旦、この大綱に「結」といキーワードを、何らかの形で入れさせていただけるような形で、私ども検討させていただき、教育委員会の事務局と相談の上で、委員さん方にお諮りをしたいと思います。この方向で進めるということで、本日のところは預らせていただいてよろしいでしょうか。

○松下教育委員会参与 教育委員会側の事務局としてですけれども、総合教育会議として委員さんに行くつか会議を開催することになるので、方向として、今のご意見を持って、事務局の中で案を調整した上で、8月18日に定例の教育委員会がございますので、その中で今一度、教育委員の皆さんにはご意見をいただいて、それをもとに市長と協議をさせていただいて策定、そんなようなことで進めさせていただくのはいかがでしょうか。

○塚平総合政策部長 一旦、事務局のほうで案を修正させていただき、ご提案申し上げます。

○林企画課長 今、事務局からご提案をさせていただきました。よろしいでしょうか。

○一同 はい。

○林企画課長 ありがとうございます。

では、協議事項といたしましては、以上となります。ありがとうございました。

4 意見交換

○林企画課長 それでは、意見交換に移らせていただきたいと思います。

本日は、お時間が10時30分までと限られてございますが、有意義な意見交換をしてまいりたいと思いますので、よろしくお願いをしたいと思います。

本日のテーマが2点、「ICT教育の推進」と「中学生期のスポーツに触れる環境づくり」についてということでございます。

(1) ICT教育の推進について

○林企画課長 最初にICT教育の推進につきまして、教育委員会の事務局から取組状況の報告をさせていただきます、その報告を踏まえて、意見交換をいただきたいと思います。

それでは事務局から報告をお願いいたします。

○桑原学校教育課長 それではよろしくお願いたします。

資料No2「ICT教育の推進について」の資料をご用意しています。

まず、『新学習指導要領における位置づけ』ということで、プログラミング教育を含む情報活用能力の育成関連で、資料中で囲った中の上の2つが、小学校・中学校共通のポイントでございます。情報モラルを含む情報活用能力が、言語能力と同様に、学習の基盤となる資質・能力と位置づけられております。それから、情報活用能力を育むために、情報教育、教科指導でのICT活用について充実を図るということが明記をされております。もう1点、プログラミング教育の実施の背景には、小学校でのプログラミング教育が必須化になっているところがございます。

次に、『GIGAスクール構想』について若干ご紹介申し上げます。

まず、資料のアンダーラインで示した部分は、1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する、とあります。これは手段というふうに思っております。それ以下が目的で、記載のとおり、育成を図るためとあります。

その方法・考え方ということですが、「これまでの教育実践の蓄積」にICTを掛け合わせて「学習活動の一層の充実」、「それから主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」をはかり、教師・児童生徒の力を最大限に引き出すという考え方と思っております。

資料の2ページをお願いいたします。『インターネット依存』では、今、身体的に様々な実害があると言われていることをまとめてございます。1番左列の区分では、①の健康被害から⑥番の注意力低下による事故・負傷まで整理をしています。その右側の教育・指導ですが、

そういったことに情報モラル教育、それから、日常的な教員による指導の中でも徹底していく。それからシステム制限措置等でも、こういった実害がないように防ぎながらICT活用をしていきたいというふうに考えております。

資料の3ページをお願いいたします。『ICTを活用した教育の目指す姿』でございますが、(1)飯田市の教育ビジョン、こちらはICTの目指す姿で変わりが無いというふうに思っております。また、(2)のICTの活用により更に伸ばしたい力が、どんな力であるかというのは、学習指導要領の中の引用ですが、資料の①・②・③それぞれの力と、これも変わりのないものと思っております。これらをICTの活用により、さらに伸ばしていきたいと、推進したいという考え方でございます。

(3)の1人1台パソコンでこんな学びを目指す、でございますが、1つ目が「協働的な学び」、それから2つ目としては「個別最適な学び」、そして、この「協働的な学びと個別最適な学びを支える情報活用能力の育成」、こちらのふたつはセットで目指す学びということになろうかと思っております。

次に『具体的活用のイメージ』は、授業における活用のイメージですけれども、授業の組み立ての中で、部分的に1人1台の端末、ICTを有効活用していきたいということです。学力向上「結い」プランでは、「ねらい・めりはり・見とどけ」のある授業とありますが、そういった授業づくり、それから地域と連携したふるさと学習・体験学習等々を、引き続き実践する中で、ICTを効果的に活用して授業改善に取り組んでいきたいということでございます。「個に応じた学び」では、1の特別支援学級以下、資料4ページのイの①から④まで、ご覧のと通りの活用が構成されています。

また(2)の休校時においては、基本的には、これは子どもたちとつながる、あるいは学べる道具となるというふうに思っております。

こうしたICTを活用した教育の推進というのは、もちろん進めていくわけですが、同時に情報モラル教育の推進も重要ですので、双方を平行して推進していくという考え方でございます。

次の『ICTを活用した推進』の関係でございます。ICT教育の推進委員会というのを設置して、教育委員会だけではなく、専門家、それから学校現場とも話し合いながら、状況を確認しながら進めていきたいということで、中核教員の研修を7月29日に計画しております。その後、校内での研修につなげていくというものです。

5ページをお願いいたします。『情報モラル教育』の関係ですけれども、こちらでも専門家を交えて、情報モラル推進委員会で考えながら、状況を見ながら進めていきます。当面の取り

組みとしましては、教職員を対象とした学習会が5月、それから専門家による児童生徒を対象にした学習会については、1学期中に全児童生徒に実施ということで、延べ46回実施されます。「自ら考えるルールづくり」も進んできておりますが、保護者との連携でこれからも対応していく必要があるというふうに考えております。

『家庭への持ち帰りについて』でございますが、当面の基本的な考え方としては、通常は学校保管を原則としながら、必要なときに必要な児童生徒が必要な期間のみ家庭に持ち帰ることできるような仕組みとするところでございます。

6ページでございます(2)インターネット利用におけるリスクの対応では、ウェブフィルタリング、アプリケーション制御等行っております。また、端末利用時間の制限ですけれども、児童生徒がログアウトしないと制限機能が働かないということですので、ここは徹底して指導していく必要がある部分です。

(3)家庭への持ち帰りの関係です。持ち帰りの申請は、情報モラル教育を実践し、そのルールを保護者とともに共有し、さらに学年ごと等使用する内容を明確にするなどして、児童生徒が学習用端末を家庭に持ち帰っても、適正に利用できると学校長が判断した場合に申請をできるというふうな仕組みで検討をしております。持ち帰りの状況については、(4)に記載のとおりでございます。

以上、この関係の説明とさせていただきます。

よろしく願いいたします。

○林企画課長 ただいま、事務局から取組状況や今後の進め方についてご説明がございました。

ここから皆様方からご発言をいただきたいと思いますが、初めに市長からご発言をお願いしたいと思います。

○佐藤市長 今回の飯田市総合教育会議の意見交換に、こちらを選んだのは、先ほども少し申し上げましたけれども、ICT教育でICT機器は、あくまでもツールだと思うわけです。それが、導入自体が目的化してはいないでしょうか。あるいは、1日でも早く飯田市が、1人1台パソコン配備することを目的として進めてきたきらいはありませんでしょうか。そういう疑問が、ひとつあります。それから、これはもう一保護者としてなのですが、うちの子どもたちも持ち帰ってきました。それで、宿題を全てこれでやることになりました、というのが、息子からの報告でした。「手で書くのはないの」と訊いたら「ない」と。「何の宿題かは、この中であって、ここから出るし、ここに回答する」という話があったので、かなり親としては衝撃的な感じがしました。

本を読んだり、ノートを書いたりという、そこを飛ばして大丈夫なのか。あるいは、非常

に長い時間、面白いというか玩具みたいな感じで、ずっと使っていたということもあって、「本当にこれは大丈夫なのかな」、どれだけの準備をして、これがなされているのかなというの、親として率直に心配したということがありました。

このあたりについては、ぜひ委員の皆さんが、どういう感覚をお持ちなのか。あるいは、5年後とか10年後とか、その先の子どもに対する影響というのを、どういうふうにご議論いただいた上で、ここに至っているのかというあたりを確認しながら、軌道修正すべきところがあればする、ということかなと思って、このテーマを提案させていただきました。今の私からの率直な感想について、「いやいや、そうではない」というところがあるのであれば、ぜひお聞かせいただければと思います。

○林企画課長 それでは、委員の皆様方からご意見、お伺いしたいと思います。

発言のある方は挙手をしていただければ、私のほうでご指名させていただきたいと思います。

それではよろしく願いいたします。

北澤職務代理。

○北澤教育長職務代理者 今回の市長の言われた懸念は、極めて最もなことだと思います。保護者の皆さんもやっぱり同様の不安を持っていらっしゃるということは、私の身の周りにはいる保護者の方からも聞いているところです。

そもそも、本来、国の施策としても2023年から順次進めていくっていったようなことが出ていた中から、コロナ禍といったようなことをきっかけにして、前倒しで実施されているので、リスク管理等への準備がないまま、タブレット端末だけは全員に配布されたっていったような、そういう性急な導入の感は否めないなというふうに思っています。

ですけれども、保護者の皆さんもタブレット端末を活用して実際に今、市内多くの学校で授業が始まっていますので、そういう授業の様子等を実際に見て、理解を深めていただいて、家庭に持ち帰ったときの利用の約束などについても丁寧な共有を図りながら進めてく必要があるというふうに思っています。

なので、結論から先に申し上げると、月並みな言い方ですけど、最大限のリスク管理をしながら、そのICTの特徴が生かせるところで有効に活用していくということになるのかなど。

そのICTの特徴というのは、私の感覚だとあんまり詳しいわけではありませんけれども、このICTの機器の特徴として1つは、脱一律というのですかね、脱一斉というか、そういうことと、もう1個は、双方向性。双方向にやりとりが本当に手早くできるという、その大きな特徴が2つあるのではないかと。

それを考えてみると、脱一律というのは、早い話が、自分の主体性で学んでいくといったようなことがうんと有効になるし、それから双方向性という点からいくと、こっちからも、そちらからも発信できて、受け止めができるというふうに考えます。

そうすると、これまでの日本の学校に多くあった、一斉に同じことがみんなできるようになるという、ある意味、それは国にとっても都合の良い力ではあったと思うのですが、これからの先の世界を考えていったとき、それだけでは渡っていかれない時代になっていくのかなと。

そうなったときに、このICTを入れる中で、市長も言うておりましたけれど、どんな力を付けることが必要で、そのためにどんな授業が必要かというところはもう1回、今、学校教育課の説明にもありましたけれど、みんなで考え直していくポイントになるものではないかと思っています。

なので、単に先生が教えるための道具としてICTを活用してするというだけでは、私はいけないんじゃないか。むしろ目標に向かって学びあうICTの活用、要するにICTやAIを自分自身が使われるんじゃないかと、使いこなしていく、そういう人に育てていかないといけないんじゃないかなと思っています。

そうすると、ICTから離れてしまうかもしれないのですが、今まで以上に、やっぱり子どもたち1人1人の確立、自分というものをきちっと確立させるような教育を心がけていかないと、結局、今、市長言われたように面白い玩具のように出てくるから、使われる人になってしまうと思うわけで、今まで以上に自分の思考とか判断とか表現力とかというものが、出せる力を必要としている。では、そのもとは何かといたら、最後に行き着くところは、私は言語能力、その言葉の力じゃないかというふうに思います。

なので、ICTを導入すると、多分、今まで以上に情報の操作量は増えるし、それから処理するスピードも求められる。その限られた中で、必要な情報を正確に活用していくという、その土台は、結局、言語能力が重要なポイントを握ってくると思います。

そうやって考えていったとき、鶏が先か卵が先かではないのですが、飯田市内の全ての教室で今「学力向上結いプラン」で、言語活動の充実ということを非常に大事にしてやってもらっているのですが、そのポイントはこれからも外せない。要するに、そこを大事にしているところにICTも活用するという、何かそういう目線じゃないかなと私は思っております。

具体的な運用のことについては、もう1回発言の機会があればそっちで。以上です。

○林企画課長 ありがとうございます。ほかにご発言はありますでしょうか。

三浦委員。

○三浦教育委員 市長さんが言われていた「1人1台端末導入が目的ではなかったのか」というようなそんなお話ありましたけれど、私は、1人1台端末はあって良かったと、そのように考えています。

やはり、1つの道具であり、子どもたちにとっては鉛筆であり、ノートであり、辞書であり、図鑑でありという、そういったものだと思っています。それを友達とではなくて、自分のものとして、自分が主体になって使うということであれば、1人1台端末、これは必要なものであったとそのように思います。

そこから出てくるいろいろな問題点も確かにありまして、例えば目が悪くなる。それから健康被害であったりとか、あと情報モラルが習得できることをどう整理していくのかという、情報モラルの問題であったりとか、確かにそういう問題がありますけれども、そういったところを小さい子どものうちから、きちんと正しく、新しくできてきたツール・学習の道具に向かって、正しい使い方をきちんと学んでいくのだといったところをする。そういうことで、ツール・道具の格差が生まれないとといったところでは、小学校・中学校を出て高校に行く、大学に行く、また社会的に貢献していくといったときに、小さいときからそういった力を付けていく、そういうことも含めてやはり必要だったんじゃないかなと思います。

それで、市長が2番目に言われている、宿題が全部そういった形だったというのは、ちょっと私も「え、そうだったんだ」と少し驚くところがありました。

そういうわけで、確かに市長の冒頭のあいさつでは「急いだんじゃないか」というようなことも言われていたと思います。確かに、思いがけないことが起こったりして、いろいろなトラブルも起こったりで、ちょっと後手後手といったところもあったかと思います。けれども、そういったところを修正しつつ、先ほど言われた宿題に関しても、これは教員、学校のほうで、またきちんとした学習、宿題のあり方を見直すといった形で、これは修正をしていくといった問題であるかと思います。そういった正しい使い方、正しい適切な学びができるという体制に、やはり何か、誤りや、これは違うなといったところがあれば修正をしながら、子どもたちに適切な使い方のできる。そういった形に持っていくところがやはり必要なんじゃないかというふうに思っています。

○林企画課長 ありがとうございます。

伊藤委員。

○伊藤教育委員 市長のおっしゃっていることは、家庭から出ていることで、ごもつともだと思いました。H a g u情報誌というのは、市長のお手元にありますか。

○佐藤市長 読みました。

○伊藤教育委員 そうですか。市長がおっしゃる不安とか、私も、もちろんそれと同じようなことを共有しているわけですが、大体って言い方はちょっといい加減ですが、何個かQ&Aになっていまして、例えば漢字の練習はどうかというのと、それもちろんと図面にしているとか、あと危険なサイトにはフィルタリングをしている話、あるいは健康の話では目との距離の話、あと家庭で必要以上にパソコンにアクセスする時間が多くあるときには、アクセス記録を見て適宜指導する。まあ一応、それなりのQ&Aができていまして、これをどういうふうに各学校、生徒児童に浸透させていくかということだと思うのですね。

また、その中で、これ以外に新たなことがICTを進める上で出てくると思うのですね。その都度、その都度、これは当然の話ですが、対応するしかないのかなというふうに私は思っております。

それで、ちょっと大きな話をしますと、国の戦略というか、高度成長から大量生産、そういう時代が終わりまして、それでIT戦略というような国家戦略から、国の成長戦略になってITを政策のエンジンにしようというような感じになってきてまして、それで文科省もICTを使いこなせる人材をと、こういう流れになってきたわけです。けれども、OECDの中でも日本が一番遅れているということで、今はちょっと知りませんが、その中でこういう政策をとりだしている。

要するに世界で、このICTというものが、いわゆる文明ですね。車と一緒に、文明社会に車が出てきたときに、すごく便利で、すごい時代になる。けども、交通事故は多発する。あるいは二酸化炭素が出る。いろんな問題を今もって引きずっております。このICTのIT戦略、ICT教育というものも、そういった課題と問題というのは、常にその良い面と悪い面があって、ずっと引きずっていくと思うのです。だから我々は、飯田の教育委員会ばかりじゃなく、日本の教育ばかりじゃなく、世界の全ての人たちが、その文明に向かって歩きながらそれを考えなくちゃいけないってことだと思うのですね。

そういう大きな中で、ちょっと大きな話しすぎましたけど、我に戻れば、その飯田市の教育というものも、必ずいろいろな新たなものが出てくる。そのときには、英知を結集して乗り越えていかなければならないのかな。私の意見としてはそういうことです。

○林企画課長 上河内委員。

○上河内教育委員 保護者としては、私もやはり同じように、今、デジタル化が進んで、コロナ禍でさらに一層子どもたちにとってデジタルが一般的になって、家でもスマホを見たりとか、ゲームをしたりとか、テレビを見たりとかということで、親としては本当にそれをどうやっ

て整理をしていけばいいかとか、どうやってコントロールをしていけばいいかということに悩んでいる立場です。

それはきっと多くの親御さんがそうだと思いますし、さらに、その学習でタブレットを使うということになれば、私たちの世代でも経験のないことですし、戸惑うのも当然なことだと思います。

そして、いろいろ、これは良いのだろうか、あれは良いのだろうかという、まさにそういったトラブルというか、問題がいろいろ出てくるのかもしれませんが。そのときにやはり立ち止まって、何が大事なのだろうか、何が子どもたちにとって本当に必要なのだろうか、ということ、不断に考えていくことが必要であって、1人1台のタブレットが飯田市の子どもたち全員に配られたというのは、すごくそれは恵まれていることで、経済的にタブレットが買えないというご家庭ですとか、地域的にちょっと遠くて地域格差なんていうふうにも言われますけれども、そういった教育の格差とかも言われている中で、やっぱりタブレットが行き渡ったというのは大切なことだと思います。

それをどうやって使いこなしていくかというのは、やはりこれからまさに考えどころで、それに使われるのではなく、ツールとして使っていくという必要があると思います。

やはり、それで飯田市を考えると、飯田の子どもたちは、やっぱりこの地域の人たちの中で守られて育ててほしいですし、そういった地域のつながりを大切にするとか、豊かな自然の中でその自然を知って、人間としてどうやって生きていけばいいかということを知るといいうか、そういった体験というのが、教育の中にもバランスをとるようにしてあることがとても必要だと思います。今回のこういった機会を通して、よく知って、より良い教育環境に整えていくってことが必要であるし、親としても子どもたちが上手にそのツールを使いこなして、これからの社会、きっとこれは必要になるので、上手に使って幸せに生きていってもらえるような導きを、地域も、先生も、親も、みんなで一緒になって守っていければいいなというふうに思います。

○林企画課長 ありがとうございます。

それでは教育長。

○代田教育長 市長、いろいろご指摘ありがとうございます。また今回いろいろとご心配をおかけしましたし、ご支援いただいたことに感謝しております。

伊藤委員が少し大きな視点での話をしていただいたので、私もその文脈でお話したいなと思っています。

今、なぜICT教育をするのかと言うと、国もそうなのですが、世界的な潮流の中

で、このICT機器をどう教育に活用していくのかというのは、大きな文明の流れです。象徴的に言われているのがソサイエティ 5.0。サイバー空間、仮想空間と現実空間が高度に融合された人間中心の社会。農業化、工業化、そして情報化社会をさらに越えた新しい時代に、これから10年後20年後は突入していくのだと。その中で、今の子どもたちが大人になるときは、今の仕事の半分がなくなってしまうとか、全く新しい社会になっていくときに、やはり学校教育の中でも、子どもたちを今までと違う視点で育てていかなきゃいけないということがいわれていると思います。

そんな中で、文部科学省が課題として示しているのが、OECD諸国の中で最もゲームとチャットに費やす時間が多い国になり、最も学習に費やす時間が短い国になってしまったという、この衝撃的なデータです。2018年に提示されました。日本としても、やっぱり学習に使っていく、さらには情報モラル教育もしっかりやっけていかなきゃいけないという舵が、コロナを機に切られました。これは北澤委員も言いましたし、また私自身も感じています。飯田市も2023年度までに1人1台端末という目標から3年前倒しとなったので、その部分は現場の混乱もあったし、私たちの準備不足もあったかなと思います。

ただ、大きな流れで見ると、今、子どもたちが10年後20年後の社会に生きていくときに、今とは全く違う社会になったときに、どんな力を付けていくのか。ここの議論をしっかりと取り組んでいくというのが、大事なことです。

そこで、文部科学省が何を言っているかということ、「学びに向かう力」、「人間性」、これを標榜しています。また、新しい学習指導要領で提示されている「主体的な学び」、「主体性を育む」ということが、どの学校でも方向転換をしています。もう少しわかりやすい言葉で言うならば、「自分で考えて、行動して、創造していく力」。それが、とにかく大事な時代になるのではないかと。これは私の持論ではなくて、まさに研究者が言っている、知識を覚えて、習得して、再生するという知識技能の習得だけでは、もう生きていけないのだ。これからは自分で考えていく。ういうことだと思います。

私なりの言葉で言うと、私は「内発性」、自ら湧き上がるような力で行動していくということが、これからの教育で子どもたちが育まなければいけない力だと思っています。

そのときに、今の授業スタイルはどうなのかということ、これは北澤職務代理と同じなのですが、そうはいつでも、まだまだ一斉一律の授業が中心です。先生が主役の授業です。先生が説明をして、先生が話題をとって。ただ、これからは、もっともっと子どもたちが主役になる授業をしなきゃいけない。そうしたときに、ICTを使って、子どもたちが意見を書き込んで、それを子どもたち同士で共有する。また、発達障害や様々な環境にある子どもたち

も、個別最適化の授業ができる、まさに子どもたちを主役に置いた多様性のあるツールであると思っています。

ここで一旦終わらせていただきますけど、やっぱり課題があるとすれば、それを使いこなします先生。今までずっとやってきた指導が、これからは、子ども中心だよと言っても、なかなか意識も変わらないし、その授業スタイルは難しいと思っています。子どもたちからいろいろ意見が出たときに、どう捌いていくか、自分たちの指導力がないと、本当に主体的な、対話的な授業というのは難しいな、そんなふうに思います。

ですので、教員の指導力をしっかり高めていく。先ほど市長が言ったように、宿題で書く、紙で読むということも大事だと言われているので、そういったところも先生たちの指導力の一部として、しっかりと共通認識を持って進めていくことが大事であると思っています。

○林企画課長 ほかにご意見いかがでしょうか。

○北澤教育長職務代理者 すみません、今、委員さん方からも、教育長からも出ていましたけれども、具体的な運用にあたって、まさにバランスって言葉が上河内委員からも出ていました。この活用とモラル、言い換えればアクセルとブレーキのこのバランスはどうしても両面からの取り組みは大事だと。

そういったとき、さっきの学校教育課の説明の中にも、4ページ、5ページですが、推進するほうの委員会と、それから情報モラル教育を進めるほうの委員会を、要するにアクセルとブレーキの両方側から設置して、そのバランスをとりながら学校で具体的に導入していくという流れは、とっても大事な部分かなというふうに思っています。

それから、そうはいつでも新しく入ってきたものなので、これを活用というのは簡単だけど、実際に生きるように使うには、まずは先生方が、このタブレットにどんな可能性があって、どんなことができるのかということから学んでいく必要がとってもある。それがなければ、ただの箱があるというだけの話なので、今、市の方でも信州大学等と結んで、各学校の中核教員を中心に先生方の底上げを図るシステムをつくっているのですが、長野県の学びの改革支援課のほうでも、飯田市のこのやり方を注目していて、どうやって先生方に浸透を図るか。その方法として、自分の学校にいながら、それができる。まさにこのICTの強みを活用した先生方の研修になっているというところで、注目しているというふうに聞いているのですけれど、こんなことをぜひ進めて、導入当初はきっと先生方主導の授業に、このタブレット端末自体を入れてもなっていくことは否めないと思うのですけれど、早く使い慣れて、その理想の形に使っていただけるようにという流れの途中では、まずは教員研修がとても大事だなと思っています。

そこへ加えて、良いなと思っているのは、この教員研修を飯田市だけで抱えていないということが、すごく大事だと思っています。というのは、飯田市の教員研修の情報を周辺町村、要するに飯田下伊那の全部の町村に流して、飯田市の先生方が受けている研修を、飯田下伊那の全部の町村の学校のほうでも同じ研修が受けられるようなシステムをつくっている。

というのは、飯田市の先生方だけが研修しても1年2年で異動して行って、逆に外から市内の学校に異動してきた先生との間で差が生じてしまうということが起こってくるので、飯田下伊那一律に、周りの町村も乗かって研修しているということがとても大事だし、周りの町村も「とてもありがたい」と言っていますけれど、この体制をこれからもぜひ続けてほしいと思っています。

それから、モラルのことに関しても、自ら考えるルールづくりということも大事なポイントに入れていただいているので、さっき教育長が言っていたその内発性というか、自分で考えて創造していくという部分に関わる部分ですけど、ただこれは駄目、あれは駄目という、どうしても駄目なものは駄目なのですけれど、ただ約束ごとにはめてしまうのではなくて、子どもたち自身にも「何でこれが駄目か」ということを考えさせながらやっていくというのでないと、最後には使いこなせる人間にはなっていないというふうに思うので、このところでも配慮してもらっていることはとっても良いなと思っています。

冒頭で結論的に言うという話で言わせてもらったことにまた戻るのですが、教育長もさっき言っていましたけれど、2011年に小学生だった子どもたちが、大人になるときは、つまり今の高校1、2年生ぐらいですよ。その彼らが大人になるときは、その65%ぐらいの仕事は存在しないというようなアメリカの学者の言葉もあるし、それからイギリスの学者の中には、今後10年から20年で半数近くの仕事は自動化されてしまうという、そんな言葉もあるぐらいなので、これからは、避けて通れない部分のことで、そうであるなら、このタブレット端末のことについても、最大限のリスク管理をしながら有効に活用して、特に飯田市の子どもたちが、これから大きな海に乗り出していく、その船の力を少しでも大きく強くして送り出してあげるのが、こういうところに携わっている私たちの責務ではないかなというふうに私は思っています。

以上です。

○林企画課長 ほかにご意見はいかがでしょうか。

佐藤市長。

○佐藤市長 皆さんの話を聞いて「すごくよくわかりました」とは、ちょっと申し上げづらいですね。腹に落ちていないです。

というのは、How Toのところは、すごく議論されているなどは思います。こういうあり方なのでこういうHow Toがあるということだと思えるのですが、僕はそういう意味で言ったら、最初、北澤先生がおっしゃった、その言語能力が重要であるという、そこは本当にそうだと思うのですよね。

これからAIだICTだというので、もしかしたら仕事なくなるかもしれないという、そういう時代に取り出していくときに、子どもの頃からタブレット端末に親しんでいて、それを使いこなすという力が、その大海原を乗り切っていく力だとは、僕は思えないのですよ。いろんなツールが変わっていても、その子の芯にあるものは何か。自分の言葉で、自分で考える、内発性とおっしゃいましたが、そういうことがあるという大前提のところ、どういうふうに確保されていて、その上で、こういうふうに使えぬとか、リスクを回避するとか、それはそうなのですが、「こういうふうな根っこがある教育があるので、心配しないでください」って言ってほしいですね。そこが、何というか、ちょっと違和感がありました。「そこが心配しないでやられているので、大丈夫だ」という話ならわかるのですが、子どもの頃から親しんでいて、というのはね、僕は違うんじゃないかと思うのですよね。

確かに、遠ざけるわけにはいかない。そこをゼロにできないから、巻き込まれないとか、使われないとか、そこは教えなきゃいけないのだけど、子どもの頃からタブレットに親しんでいるから使いこなせる、というのは、そうじゃないんじゃないかと。うちには3人子どもがいますけれど、1番上の子にはほとんどICTには触れさせてないで育てましたが、今、立派に大学生で使いこなしていますよ。僕らも子どもの頃に車運転できたわけじゃないのに、今、車乗っているじゃないですか。だからそうじゃなくて、まさに揺るぎない言葉の力だったり、揺るぎない自然からの学びだったり、そういうのがあって、「ICT使っているから大丈夫だ」って言ってほしいですね。

○北澤教育長職務代理者 ちょっといいですか。すみません。言葉足らずというか、今日のテーマが「ICT教育の推進について」だったので、そっち側からの発言に偏ってしまいましたけれど、冒頭のほうでちょっと触れさせてもらいましたが、あくまでこれは道具であって、だからこれがあれば何でもできるなんていうふうには全く思っていないし、だからそういう道具を使いこなす、その根っこになる人間、これも市長と全く同感です。

その根っこになる人間性といったときに、その一番の根幹になるのは何か。それはいろいろなところでいつも言うのですが、結局、言葉だと思うのです。言葉の力をいかに子どもたちに獲得させてあげるか。それはもうみんな、大人が考えていかなきゃいけない大事なことだと思っていて、その中に一番ポイントになってくるのは、例えば言葉、語彙ですね。

語彙の数を、いかに小さいときから増やしてあげるか。これは学校だけじゃなくて、家庭でも、みんなですていくかということが一番のポイントだと思います。

結局、私たちが、考えている言葉は日本語を母語として考えているのですが、その「考える」ということのもとは何だと言ったら言葉で考えているわけで、だからその言葉をきちっと根幹につくってあげなければ、いろいろな事象に出会っても、結局、人として成り立たないというふうに私は思っているのです、そうすると飯田市でもすごく力を入れていますが、例えば小さいときからの読書といったことは決してないがしろにはできない。

それから授業の中での受け答えですとか、要はきちっと人のほうを見て言葉を投げかける、言葉をちゃんと受け止めるとか、単純に言えば「聞く・話す・読む・書く」というその基本的なことを、きちっとできる授業とか、そういうものがあつた上でのこれだということころは、確認しておきたいので、お願いします。

○林企画課長 三浦委員、どうぞ。

○三浦教育委員 そうですね。市長の今のご発言は、私の発言での「こういったものを小さいときから使っていくのは」という発言があつたことだったかなと思います。私はちょっとICTのことにに関して見るという形で話してはいたけれども、でも私が学校訪問とかで学校を回らせていただいても、授業のあり方が、これが1つの道具ツール・道具を導入させてもらったという形で、子どもたちが学んでいる核になる教育といったものがどんどん変わっているという、そういったことで私は見ていません。道具の1つであつて、先生方の授業、黒板を使った授業で、板書があつて、横に電子黒板があり、そこに、新たに教科書、資料が映し出されていたりするという、そういった環境も、また少し良くなっている。そこに子どもたちが自分の鉛筆でノートをとっているところも確認してはいて、ものを書く、そして読む、そして、そういった新しくできたツールで仲間たちとのやりとりをする。または、ほかの離れたところの仲間メッセージを送るものも、それで作成する。それをやりとりする。そういった新たなツールが導入されたといった形を感じてはいて、全部が全部この端末で教育が行われるようになってきた姿は、私は見ていませんので、そういうところでは教育の核が何か変わったというような形ではまったく捉えてはいません。

何が導入の目的だったかという、導入というかツールを増やしたというような、今、必要であるツールを子どもたちに増やして、それが使えるようにというふうにはしている。でも、その教育で読む、書く、そして計算するっていった、そういったところに関して何か大きく変わる、何か教育でそれが低下するということはなく、新しいツールでより学ぶ楽しさが増えたといったような形で見えています。

○林企画課長 ほかにご意見はありますか。

上河内委員。

○上河内教育委員 人間としてどういうふう育てるかというすごい根本のところというのは、本当に、一番教育の重要なところであると思います。

飯田市でいいなと思うのは、保育園の頃から「やまほいく」といって、こう自然とふれあう機会を大切にしたり、遊ぶ機会を大事にしたりというのは、都会にはない強みじゃないかと思いますし、それが引き継がれて、やはり、ふるさと学習とか、地域の人とのふれあいとか、そういった学習というのを大事にしていくことは、人としての力をいろんな判断力とか、言葉を使う力とかのもとになるものではないでしょうか。どうでしょうか。

○林企画課長 そのほかいかがでしょうか。

そうすれば次のテーマもございまして、最後に市長のほうから一言。

○佐藤市長 はい。まず率直な意見交換ができて良かったと思っています。

先ほど申しあげましたけれども、ICTというのは、やっぱりいろいろある教育ツールの1つであり、そこには新しい可能性もあると同時にリスクもあるというのは、今日、皆さんご議論していただいたとおりです。それが子どもたちの教育にとって、教育というか人づくりですね、さっき言った揺るぎのない飯田市の人づくりの中で、どういうふうに使われるのかという、そのあくまでもツールの1つだということさえ見失わなければ、大丈夫ではないかということです。それから、やっぱりそのリスクの方で言うと、我々が今、目の前ではわからないリスクも多分あるのだろうと。5年後、10年後の子どもの姿を振り返って見たら、「あのときの、あれが、ちょっといけない影響があったかもしれない」という、そういうことは常に意識しながら、やらなきゃいけないんじゃないかなというふうに私自身は思っています。ですので、ぜひ委員の皆さん、あるいは学校現場でも、そのツールの持ついろんな効用とリスクについて、よく見ながら、飯田市の教育の根幹は見失わないようにやっていていただきたい、そんなふうに思います。

(2) 中学生期のスポーツに触れる環境づくりについて

○林企画課長 それでは続いてのテーマに移らせていただきたいと思います。

「中学生期のスポーツに触れる環境づくりについて」ということで、まず事務局から説明いたします。

○伊藤生涯学習・スポーツ課長 よろしくお願いたします。資料No3をお願いいたします。

「中学生期のスポーツに触れる環境づくりについて」であります、『子どもたちの実態』

を、体力、運動能力、運動時間等の調査のデータで整理してあります。

資料（１）のアは体力テストの合計値になりますが、グラフの点線が飯田市、実線が全国ということになります。今回は中学生期ということで、グラフの下半分が中学生ですが、男女ともに平成 27 年から継続して全国を下回るという状況が続いているのが実態でございます。

資料の（イ）は、それを総合評価、５段階で割ったＡＢ割合を示しており、全国平均と同じような状況でございます。

２ページの（２）は運動部活動の加入率ということで、何パーセントの割合が適正かというものではありませんが、令和２年度、平成 27 年度と比較しますと、生徒の割合で運動部の加入率は低下している状況で、３学年を合わせますと、この間で 5.1%減少という状況でございます。男女別で見ますと、特に男子が 11.2%と大きく減少をしております。

（３）が「保健体育の授業以外で１週間どれくらいの運動時間になりますか」ということを聞いた問いですが、小学校・中学校ともに 60 分未満、１時間に満たない運動時間の割合は、全国と比べて飯田市が高いという結果が出ております。

（４）が、同じ調査の中で「運動が好きか嫌いか」ということの４択ですが、「好き・やや好き」と答えた割合は、全国より高い傾向があるということで、特に中学生では、令和元年度は少し全国並に落ちておりますが、好きだという子どもは多いということが実態として明らかになっています。

３ページをお願いいたします。『中学生期のスポーツ活動の課題と問題意識』であります。１つ目は、実態からわかるように運動能力の結果が低かった、運動時間が少ないということです。特に、部活動の加入率の低下が減っていれば、子どもの数も少なくなったことによって、選択できる種目が減っているということもあるのかもしれませんが。運動時間については、特に、通学の際に保護者の送り迎えが増えているということで、日常生活において歩くことが少なくなっていることも懸念材料の１つかなと考えております。そういった中で、運動機会のない、または少ない生徒に対して、スポーツに触れる機会を提供することで、生涯にわたってスポーツに親しむ、そういったきっかけを作っていく必要があるというのが１つ目の課題です。

２つ目は、成長期の適切なスポーツ活動の推進ということで、これは、適正なスポーツ活動によって競技力を高めていくことが本来の目的であります。30 年度の実態調査の中で、社会体育を含めた練習時間が、少し長いのではないかという課題が見えてまいりました。

また、スポーツ分野での研究の中でも、１年間に 8 カ月以上競技練習を行っていたり、主

に行うスポーツを1つに決めていたりすることが、ケガのリスクを高める要素であるという
ようなことも研究結果があります。体と心を回復しながらリフレッシュするために、十分な
時間をとって、適正なスポーツ活動を推進していく必要がある、というのを課題として整理
しております。

そういった課題解決のために、当面、重点的に取り組むものとして、現在、学校部活動の
適正化と、地域におけるスポーツでは全市型競技別スポーツスクールに取り組んでおります。

学校の部活動に関しましては、長時間化する部活動は適正な時間に戻すこと、延長部活動
として行われている社会体育は廃止ということで、昨年度から行っているこのアンケートを
生徒・教職員・保護者に配りながら、ご意見をいただきながらであります。今年度につい
ては、飯田市の活動指針の見直しに触れて、現在検討会議を重ねているという状況ござい
ます。

全市型スポーツスクールに関しましては、昨年度から本格実施をいたしました。昨年度
の参加生徒の状況を見ますと、約8割が部活動と同じ競技種目に出ているということがあり
ました。また、なかなか運動の機会が少ない子が多いということも踏まえて、令和3年度に
ついては、いろんな種目を体験できるという体験型スクールも7月から開催をしながら、少
し改善をして取り組んでおります。

4ページをお願いいたします。『スポーツ活動の時間とケガに関する参考資料』というこ
とで、中体連や新人大会でボランティアとして救護支援活動を行っていただいております飯
伊接骨医院トレーナーズ協会の皆さんの調査結果からでございます。

過去5年間の大会期間中のケガの件数ということで(1)が中体連、(2)が新人大会です
が、いずれも減少をしているということですが、この団体の皆さんからは、それぞれの年度
によって競技数や会場数に違いがあるのと、令和2年度については、特にコロナ禍で観客が
いなかったりしたことで、選手のアドレナリンの出方とか、そういったものも違うだろうと
いうことで、継続した調査が必要だろうというお話はいただいております。減少の1つの要
因としては、練習時間が少なかったことで、ケガを抱えたまま練習を繰り返すことがなく、
完治して大会に臨めたのではないかと、とのコメントをいただいております。

説明は以上でございます。

○林企画課長 ただいま事務局からご説明をいたしました。

子どもたちの実態や、スポーツ活動の課題や問題意識、あと重点的な取り組み等について
ご説明を申し上げました。

それでは意見交換に移らせていただきたいと思います。まず市長からご発言をお願いし

ます。

○佐藤市長 これは、元々は部活の長時間化、それから部活動の延長として行われる社会体育、これが見直されたということなのですが、これもまた一保護者として見たときに、子どもや周囲の保護者には、教育委員会の意図が理解されていなかったというふうに思いました。

僕自身は、何となく中身はわかっていたわけですが、保護者の皆さんの話は、「先生の働き方改革で、なぜ子どもの部活動が奪われなくちゃいけないのか」というような話から始まっていて、やっぱり理解が進んでないな、というのが率直な感想でした。

そのこともあって「中学校期のスポーツについて」というテーマで、今回、意見交換をお願いしたわけですが、今日、資料を見ていて、3ページの2の『課題と問題意識』が、例えば、その年間8カ月以上競技練習を行っていること自体が、身体のケガのリスクを高める要素になっていたり、ほかのスポーツをしないことも同じく人体のケガのリスクを高める要素になっていたり、というようなことが完璧にわかっているならば、それをもっと子どもたちに、あるいは保護者たちに、指導者たちに、伝えてなければいけなかっただろうなど。

そういうこともあるので、時間は適正化してケガを少なく、実はそれが強化につながるのだからという理解があれば、平成30年度の混乱も、もっと少なかったのではないかなというふうに思いました。

今日は少しテーマが広いので、先ほどの部活の話に限らずということで良いと思いますけれども、このあたりの一連の動きが、保護者や子どもたち、あるいは先生たちにもうまく伝わってなかったかもしれないという問題提起から、少し意見交換をさせていただければと思います。

○林企画課長 それではご発言をお願いいたします。

○北澤教育長職務代理者 今回の部活動に限った話は、後ほど発言させてもらうのですが、今日のテーマが中学生期のスポーツ活動、というかスポーツの環境という、ちょっと間口の広いテーマでしたので、でもこれ入り口はスポーツだけれど、改めて考えてみると、本当に様々な課題を含んでいるなというふうに思っています。

例えば、学校、家庭、地域、行政、それから当の本人、それぞれのところで課題がある。例えば学校は、これまでかなりの部分を学校に担わせてきました。学校もほとんど引き受けてやってきたけれども、いよいよ限界に来ている。そのことについては後ほど触れます。

それから家庭についても、子どもの体力づくりやスポーツを通じての人づくりといったようなことについては、学校や地域にほとんど任せていて、スポーツのこととか、子どもの体力づくりのことに積極的に興味を持っていらっしゃる方ばかりではなかったのではないかな。

それから、地域に目を向けると、今、スポーツ協会の皆さんとかいろんな方と関わりがあるので、こんなに頑張ってくださっているのだというのを受け止めつつですけど、本当に一部の志のある方々の活動に頼っていて、地域として将来を支えていく子どもたちの体力づくりや、スポーツを通じて1つのコミュニティができますよね。そういうスポーツコミュニティを作るのだったっていったような発想があったかどうかといったこと。

それから行政としても、いくつもあると思うのですが、私一番直近で思っていることは、最も目の前に迫った課題としては、子どもたち中心に考えたときの学校の適正規模というのはどういうふうに考えているのかということです。具体的に言えば、生徒数の減少で部活の種類も本当に限られたものしかなくて、やりたいけれど中学校にやりたい種目がない。それから小学校のときには、地域のスポーツ少年団でやっていたのだけれど、中学へ行ったらその種目が全くなくて、結局、部活動には入らないといったようなこと。市内の中学校の生徒数の推移等を見ていくと、本当に6年後くらいにかなり深刻な状況になってしまう中学校が約半分あるわけですよ。

その辺のことについて、本気で考えていかないと、6年なんていうのはすぐに過ぎてしまうので、本当に大事な課題がこのスポーツ1つとっても裏にあるなということを思いました。

それから本人、中学生たちに向かってちょっと厳しいことも言うのですが、体を動かして汗を流す体験とか、仲間と1つのことに取り組んで成し遂げた体験といったようなところから、自分の心や体が育まれて、今はそんな自覚はないかもしれないけれど、実はそれが結構、将来の自分の何かに向かっていくときの土台になっているんだっていったようなところを、もう少し自分自身でも考える。それから何か運動機会があったら一歩踏み出すものも持ってもらいたいし、大人の私たちも持たせないといけないと思います。

学校がいっぱいだという話と、体力の低下の話に戻ると、しばらく前までの学校だったら、家庭で云々言わなくても学校で、要するに週6日制から隔週5日制、5日制というふうに、段々学校にいる時間が短くなってきたわけですよ。ところが短くなってきたのに、子どもたちが学習指導要領で学ぶ教育課程は、その学ぶ範囲がとって増えてきているという逆のことがあって、従って学校の今、5日間の日課の中では、ほとんど連日6時間授業で、体育の時間以外に子どもたちが体力をつけるとか、スポーツに親しむといったような活動は、ほとんど組めていないというのが現実です。

しばらく前だったらクラスマッチがあり、登山があり、遠足がありといったような、それから学校にある意味時間のゆとりがあったので、朝か放課後に全校体操とか全校運動かという名前で、全校生徒が一斉に活動する時間もあった。

結局そういうもののほとんどがなくなってしまう中で、子どもたちの体力低下と言っているのもやむを得ない。なおかつ登下校の安全ということもあって、徒歩通学をしていない。実際は、せっかく体力をつける大事な徒歩なのだけれど、その徒歩もなくて、車といったお子さんたちがいることも事実。この部分を、学校だけに求めても、無理じゃないかというのが率直な感想です。

以上です。

○林企画課長 ありがとうございます。

伊藤委員。

○伊藤教育委員 先ほど市長から、部活の延長は止めるとか、今、教育委員会でいろんなことを話したときに、意外と保護者とか社会とか周りの地域の方たちに伝わってないんじゃないか。それは確かに伝わってないということは、我々も説明の仕方が足らなかった点だろうと思います。

実は私が話したいことは、先日の定例会でお話しましたが、部活動のアンケートというすごく膨大な資料がありまして、その中で「部活動では楽しむことが大切だと思うか」という設問に対して、生徒は88%が部活動を楽しみたい。それから今日のテーマとちょっと外れていますけれど、教職員の方も82~83%が「部活動は楽しむものだ」というふうに捉えているわけですね。

それで、今度は、さらにちょっとそこからまた各論に入るのですが、「部活動では勝つことや入賞することが大切だと思うか」という設問に対して、先ほどの生徒の88%の部活動を楽しむという中で、そんなに勝つことや優勝することが必要だとは思わないけれども、でもやはり自分のスキルアップとか、やる以上はある程度目的をもっていかなくちゃならない、というのが41%なのですね。その半分弱は、いや、そんなに勝敗とか、そんなにガチになってやらなくたっていいのだ、と。何をしたいといたら、友達とスポーツを楽しみたいのだ、仲間づくりをしたいのだ、と。そういうことなのですね。

私は、その地域の方たちが、今ひとつ、この生徒が本当に部活動を楽しみたい、スポーツを楽しみたいということが伝わってないんじゃないかなと。その中の楽しみたい、でも二分される。スポーツを本格的に自分のスキルアップしながら目的に頑張っていくというのと、いや、仲間と楽しみたい。この2つあるわけですね。

今日いただいた資料の2ページ目の加入率の表を見ますと、ちょっと字が小さいんですけども、平成27年から令和2年のところ、男子の70%くらいの加入率が60%くらいになっていますね。それから女子は、40%台が同じ40%台ですね。これ、不思議なのですよね。

コロナで減るかと思ったら女子は減ってないけれど、男子は減っているのです。私はこの40何%というのが、部活に入って、本当にガチにやりたいのがこの40何%で、男性のほうが76%くらいあるのは、これは男性のほうが体動かしたいとか、スポーツやりたいという人が多いのですけれども、これ令和2年になって60%台に落ちているというのは、やっぱり仲間意識とか、楽しみたいという、そういう人たちが減っているんじゃないかな。女子は、やっぱり楽しみたいと思っていても、そういう「楽しみたい」というので部活は入っていけないんじゃないか。ちょっと遠慮しているんじゃないかなと。私はそういうふうに推論ですけど、捉えたのですよ。

要するに、これからスポーツを楽しむためには、部活に入ってきちっと大会に出たり、目標を定めるという、そういう人たちもいるのですけれども、楽しみたいというそういうクラブ、もちろんケガをしちゃいけないのですけれども、仲間づくりをしながらスポーツを楽しみたいと。そういうところの層に、いろいろと今、教育委員会でも選択肢を持ってやっているわけです。そういうふうにすると自然と増えてくるんじゃないかと。女子は特に、運動するパーセンテージが上がってくるんじゃないかなと。そういうふうに思うわけですね。

当然そういうスポーツをする機会が増えれば、今度は体力測定というか、そのときにも数値は、自ら上がってくる、自然に上がってくるのではないかと。飯田市全体が低いのですけれども、そういうところが一番焦点としては伸びるところじゃないかなと、そんなふうに思います。

以上です。

○林企画課長 ほかにご意見いかがでしょうか。

上河内委員。

○上河内教育委員 部活について、保護者の人たちが、みんな理解が少なくて混乱していたというのは、私も保護者であるわけですから、そういった周りの空気を感じていたわけですから、やはりそういったことをきちんとこうその場で発言していくというのが私は保護者として、教育委員としてさせていただいている立場として、そういったこと大事なのだなということ、今、反省をしています。

中学生のスポーツのほうですけども、それはやはり今、どうしたらいいかってふうに本当に迷いどころにあって、やっぱり中学生期で運動すると、やっぱり将来にわたって運動するというのは、(人生)100年時代ですから大事なことなのですけども、二極化していて、一方では過熱化していて、一方では本当に全然スポーツをしない子が増えているというところがとても問題なので、そこをどうやってみんながスポーツを楽しむのでいけるかということ

を考えていかななくてはいけないのだと思います。

部活のほうは、そういったわけで過熱化を抑えていくことで、もう少しスポーツ苦手と
思っている人でも入りやすいような感じになったらいいなと思いますし、スポーツが苦手だ
と
思っている子は、だからといって急に誰も知らないところに体験に行くというのも難し
か
たりすることもあるのは周りで見えています。なので、学校で体育の時間にどうやって
体
を動かすのは楽しいかというようなことですか、今、減ってしまった登山とか遠足とか
ク
ラスマッチなんていうものも、本当に大事なのだということを改めて考えて、みんな
で
そういった体力づくり、面白いということを考えていくことは、大切に考えてい
か
なくてはならないかと思いました。

○林企画課長 ありがとうございます。

三浦委員。

○三浦教育委員 市長が問題提起された「理解の進んでいなかったんじゃないか」とい
っ
たところに関しては、それは反省すべき点だと思います。やはりきちんと理解をして
い
ただいた上で、進めていかなければいけないことだ、これから理解を得るよう
に
努めていかなければいけないことだということを感じました。

それとは別に、今、自分がスポーツのことで思っていることでは、この間、筑波
大
学の清水紀宏先生の中学生期に関する部活動に関する講演会をちょっとお聞きする
機
会がありました。そのときに自分の頭の中で整理ができたのは、「教育のタイプ、教育
現
場での部活動、これと、あと、社会の中でのスポーツというものは共存し得ない」と
い
う言葉がありまして、私もそこで、「あ、なるほど」と思って聞いたのです。

軒並み、体力の面でも、今の全市型のスポーツ、飯田市もやっていますけれども、
そ
ういったところに子どもたちの体力の向上を求めるということではなくて、学校
で
求めている子どもたちの体力は、やはり学習指導要領で大変という話、代理者の
ほう
からも発言がありましたけれども、やはりある一定ラインまでは、きちんと学校教育
と
ある意味、学校部活動、学校教育の中できちんと体力、一定ラインまでもって
く
る。そして、やはり部活動というものは、スポーツは楽しいというところをきち
ん
と教育できるというところに目的があって、それ以上のスポーツ、地域のスポーツ
の
整備というものは、スポーツにそこで楽しんだ、こうすれば安全にスポーツ体育
が
できるのだというところの保健体育をきちんと学校で押さえた子どもたちが、
地
域の中にそういったスポーツ支援があって、それを活用できると。このように
考
えていけば良いのだと、ちょっと整理ができた講演会でした。

ですので、そんなところを踏まえつつ、これからの飯田市のスポーツのことを考えてい
き

たいと思っています。

十分な説明、地域の理解に教育委員として反省するところではあります。

○林企画課長 ありがとうございます。

ほかはよろしいでしょうか。

教育長。

○代田教育長 私のほうからは、保護者、児童生徒に、こういった施策が理解できてないというのは、教育委員会の責任、そして私自身の責任もあると思っております。これについては、今後もしっかりと理解をしていただけるように進めていきたいと思っています。

今日は、テーマが2つなのですが、あえて同じ課題と同じ方向性ということで話をさせていただきたいと思うのですが、なぜ今、スポーツの環境を改善し、こういった改革に取り組んでいるかということ、上河内委員もあったように、子どもたちが生きる社会が100年時代になってきて、さらにICTと絡めると、体を動かす、スポーツを享受することの大切さが、より重視されています。自身がスポーツ社会の形成者、スポーツ市民になっていくということが大事な要素になってくる。子どもたちには、そうやってほしいな、という大きな願いがあります。

それでは、中学校の今の実態を見てみると、やはり、燃え尽き症候群の問題や、ケガのリスクが多い状況というのは改善しなくてはいけないと思いますし、他種目をやったり、また場の多様性、つまり、学校であったり、地域であったり、サークルであったり、中学生期の多様なスポーツの経験があればあるほど、生涯スポーツにつながっていく。こういうことがデータでも出ているので、ぜひこういう方向に、飯田市のスポーツ全体がなっていくといいなど、大きな視点で言うとそう思っています。

そこでの課題というのが、大人の問題、指導者の問題というのがあって、先ほどのICTの授業で主役が先生になってしまっているのと同じで、それを子どもたち中心の授業へとという指摘をさせていただきました。スポーツに関しても同じ傾向、課題があると思っていて、子どもたちを中心にとすると「いや、子どもたちが勝ちたいと思っているから私は指導しているのだ」というふうに言われる指導者も多いわけですが、今回アンケートをとってみると、子どもたち自身は、それほどまではやりたくなかったのだ、と言う声は聞こえてくるわけです。ここにおいても、子どもたちがやりたい、まさに自分で考えて行動していくという力を育むような環境を、指導者や教育委員会、また保護者全体も一緒になってつくっていかなくちゃいけないんじゃないかな。繰り返しになりますが、子ども自身がやりたい、楽しみたい、という、主体的、創造的な活動ができるような教育スポーツ環境というのをつくっ

ていく必要があると思っていますし、そのためには、具体的な施策として学校の部活動時間の適正値化、そして様々なスポーツが選択できる飯田市の環境、こういったものをしっかり整えていきたいと思っています。

よろしくをお願いします。

○林企画課長 まだまだ話題、議論は尽きないところだと思います。お時間が少なくなりましたが、何かこれだけはどうのご発言ございませんか。

○北澤教育長職務代理者 さっき伊藤委員がアンケート結果のことを言っていましたけれど、課題ばかりじゃなくて期待もあるな、希望もあるなということで、1つは今日いただいた資料のところの2ページですか、一番下の図を見ると、運動が好きという割合が決して低くないというところを、何とか、きっかけや場を提供して、ぜひそれを育てたいというのが1つです。

それからもう1つは、この部活のことについても、当初は市長も冒頭に言っていましたけれど、時間の長さといったようなことから課題としてきたのですけれど、今、このアンケートなども続けながら、中学校で校長先生をはじめとして、先生方からの投げかけも続いてくる中で、子どもたち自身が、ただ時間の長さとかという話じゃなくて、部活動って何のためにするの。それから自分たちは、どういうふうな態度で部活動に参加したらいいのだろうという、要するに本来この活動は自分たちの活動なのだということに、大分各学校の議論が降りている。学校によっては、校長講話でそういう投げかけをしてもらって、全校で討論したっていったような学校も聞いています。

改めて部活動について、この活動は本来、子どもたちのための活動なので、一指導者が自分の目的のために、子どもを自分のものになっているといったような指導もまま聞くし、今朝の信毎を見ても、ある部分にはそういうことが過熱して、暴言や体罰やそれで子どもが不登校になったという記事が載ってしまっていて、最近1日おきくらいにそういう記事が信毎では載っているのですけれど、そういうようなことを防いでいくためにも、このことが話題になっていることは、とても良いことだなと思っています。

以上です。

○林企画課長 それでは最後に（2）番のテーマも含めまして、全体を通して市長からの発言をいただきたいと思っています。

○佐藤市長 ありがとうございます。

後半のスポーツの話題については、最後に北澤さんにおっしゃっていただいたように、そのあり方というのですかね、何のために部活動をやるのかというようなところから、子ども

たちが、あるいは学校現場が、考えていただくことで、いろいろなことが変わるというか、良い意味で変わっていくんじゃないかなというふうに期待をいたします。

スポーツ、運動部に限らず文化部もそうですけれども、楽しむということの中に、強くなるから楽しいということも含めてあるかとは思いますが、そこに適切なデータとか、適切な指導法とか、そういうことがうまくかみ合ってきたり、あるいは子どもたち自身の部活動に対する捉え方が、ちゃんと地に足がついてきたりすることで、ただ長いとか、ただ厳しいという部活ではなくて、強いことも含めて楽しくて、子どもたちが納得して取り組んでいく部活動になっていくのかな、というふうに思って聞いておりました。ありがとうございました。

全体を通じてということですが、今日あえてちょっと問題意識を投げかけさせていただきました。冒頭のあいさつで申し上げましたように、子どもたちにどういう影響があるのかというのは、本当に短期的にはわからないことが沢山ある。特にICTは、極めて慎重にいろいろやっていかなきゃいけないのではないかなというのが私の思いです。

ちょっとHow Toばかりじゃないかと、厳しいこと申し上げましたけれど、そこは汲んでいただいて、ぜひ子どもたちの5年後、10年後を考えたときに、このあり方は良いかというのを常に考えていただきながら、ICTにしろ、部活動にしろ、見ていただくということではないかなというふうに思っています。

今日は、時間が十分ではなかった部分もあるかもしれませんが、またいろんなテーマで皆さんと議論ができればと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

○林企画課長 限られた時間ではございましたが、貴重なご意見、意見交換ありがとうございました。

5 その他

○林企画課長 それでは次第に戻りまして、5番、その他ということでございますが、何かご発言等ございましたらお願いいたします。

伊藤委員。

○伊藤教育委員 すみません、時間が来ておって、貴重な時間をいただきまして、実は、先ほどの教育委員会の中期計画の中で、文化系、スポーツ系のことがありましたが、文化系のことで、重点目標の年度戦略の中に、新しい文化会館についてのことがございます。

その中で、今年のテーマとして、「飯田市の文化芸術活動の拠点施設として新文化会館の

建て替えに向けて検討する」と。その中に「十分な駐車場を確保できること、それを前提条件として交通アクセス、周辺環境などを踏まえて建設適地の検討を進める」と、今年はそういう戦略になっております。

それで今、まちづくり懇談会を行っておりますが、先日、東野のまちづくり懇談会があって、その2日後あたりに地方新聞のトップ記事に「市長が言及した」ということが出ておりました。それは、その今言った話で、新しい文化会館を建て替えるにあたって、駐車場の問題を解決しないと、次の段階に進めないと。そんな趣旨のことが書かれておりました。

そこでちょっと、そのことについて触れさせていただきます。

駐車場の問題というと、丘の上は有力な候補と言いながらも、やはりどこの場所にするかということと、その駐車場の大きさということを考えなければならないわけで。私ども、まちづくりの有志が集まって中心市街地を考える会というのがありまして、2年前にそのビジョンを提案させていただきました。

それによりますと、話が長くなりますのでちょっと短めに言いますと、もう、ずばりJR飯田駅前ということ提案させていただきました。20年後の未来のビジョンということなので、その頃には当然、リニアが10年先くらいには通っているだろう。それから10年くらい先の話を見込んでやったわけです。

その場所はJR飯田駅前の、ずばり言いますと、今のアイパーク、そしてその隣の駐車場、その周辺と、20年後ですから延長上ということにはさせていただいたわけですね。そこをまず新しい文化会館が一番良い場所じゃないかと、そういうふうなビジョンで考えたわけです。

次に、駐車場の台数なのですが、今の高羽町の文化会館ですね。ここに駐車場の案内図がありまして、第1から第9の駐車台数を見ますと312台になっております。この300という数字が基準になる数字になるだろうと。と言いますのは、この高羽町の文化会館は、築50年ということで、この半世紀の間、この半世紀というのは車社会、モータリゼーションの時代にこの300台で、足りないときもあったかもしれないけれど、一応、基本的には(300台で)やってきたということで、300台ということを一応基準にしたいと思います。

それでは、どこに駐車場を確保するかということでございますが、本町通りを上がっていったところに踏切がございますね。そこを右に回りますと、市営の飯田駅西駐車場、職員の方も利用されておると思いますが、そこがございます。そこが今、平地で80台くらい。そこにちょっと層を上げるのですけども、2層で160台、3層で240台、4層で320台、なからでも300台という数字が、積み重ねるとできるということです。それをペDESTリアンデッキと言いまして、陸橋ですね、それを向こうへ渡せることができれば理想なのですが、踏切

も使えます。

当然、この駅前の開発なので、JR 東海さんとの良い意味での提携・連携が必要になってくるわけですね。一緒に開発するという、共同開発という形をとれば、そういった陸橋も夢ではないのかなと、そんなように思っております。

そうして、その市営の駐車場の通りを挟んだこちらに民間の月極の駐車場があるのですが、これが大体固まりで 100 台くらいのところがあるのです。これは、よそ様の所有権のあるところなのですけれども、今、都会で「アキッパ」と言いまして、そういう事業が注目を浴びていますね。空きのパーキングで「アキッパ」って言うのですけれども、要するにそういう駐車場が昼間、ウイークデイの昼間は利用度が高いのですが、夜間はほとんど使っていない。あるいは日曜・祭日が使わないのですね。

文化会館の催しというのは比較的、日曜・祭日にイベントが大きなイベントが行われる。あるいはコンサートなんかも、夕方か夜にかけてやる。そういうときに、うまく所有者との契約ができれば、常に（駐車場を）持ってなくても、そういう補完をすることができるんじゃないかということです。

それからもう 1 点、今、飯田駅前プラザの 1 階に商業施設が入るということですが、その玄関から JR 飯田線で行きますと地下道がありますね。それを潜って出たところに、駅西広場ってあるのですね。ちょっと静かな綺麗な空間なのですが。その一片は車が通れないような道路があるのですが、そのようなものを、うまくアイデア次第で、その公園と一緒に一帯になって開発できれば、これも有効な駐車場になるんじゃないかと。これ積み上げるかどうかはともかくとしまして、これが今、駅前プラザも商業施設が入るということで、多分、丘の上の中の駐車場シミュレーションができていますけれども、そういう必要性が出てくるときが来るのではないかというふうに考えられます。

それで今いった、その駅前プラザのシミュレーションの駐車場も、それから大きな会議のときには、この市役所の駐車場が、意外とここに、今度は近くなってくるのですね。ですから、それも補完する意味で、そういう利用の仕方もあるではないかということです。

ちょっと早口でしゃべりましたけれど、最後にまちづくりのことに触れて終わりにしたいと思います。

まちづくりの三種の神器というのがありまして、1 つは市役所、もう 1 つは市民の心のよりどころ、もう 1 つは文化会館・文化劇場って言われているのですが、市役所庁舎はここへでんと腰を据えていただきました。もう 1 つ、市民の心のよりどころとなると、これはやはりリンゴ並木とか大宮の桜並木、やはり最後は文化会館だと思うのですね。

私が、この丘の上を人間の首から上に例えてよく話をするのですが、大切な頭脳があります。これはまちづくりで言えば何かと云えば、それは行政であり、まさに市庁舎市役所、まちづくりで言えば市役所、あるいは経済の中核機能だと思ふのです。これは頭脳の部分です。それでは顔の部分は、まちづくりで例えると何だかってことなのですが、人の顔には五感が集中していますね。視覚・聴覚・臭覚・味覚でしょうか。それは感性なのです。感性、これはまちづくりで何かと云えば、やはり文化なのです。私は、もっとずばり形に表せば文化劇場だと思ふのです。

まさにこの文化劇場が、文化会館がまちの顔であり飯田の顔だと。いずれは世界の顔になるというふうに、そういうふうに思ふのです。リニアが開けば、当然、全国から、東京・名古屋、そして大阪まで、速く、あっという間に飯田に来られます。また海外からも、そういうときに、あっという間に飯田に来られるようになる。

そんなときに JR、交通、高速交通拠点のリニア駅から、この飯田の中心拠点に来たときに、皆さんが JR 駅前に立って「人形劇フェスタで有名な文化会館、飯田の文化会館はどこですか」と言ったら「JR 飯田駅の前であそこですよ」って建物が見える。

そうしてまた今、オリンピック・パラリンピックが行われています。このユニバーサルデザインで考えれば、お年寄りとか車椅子の方が駅前に降り立ったときに「文化会館どこですか」と言ったら「あそこです」って言えば歩いていけるような、そんなところにぜひお願いしたいと思ふます。

○市長 参考にさせていただきたいと思ふます。

○伊藤教育委員 30 年後の日本一の住みたい場所にしていただきたいと思います。失礼しました。

○林企画課長 そのほかご意見ございますか。よろしいでしょうか。

6 閉 会

○林企画課長 それでは、以上をもちまして、第 1 回の教育会議を閉じさせていただきます。

本日は、大変ありがとうございました。

閉 会 10 時 50 分